

かんきょう再生ニュース



この情報はインターネットより、資料として収集致しました。各々マスコミ各社の著作権が有ります。大量に印刷する等は、ご連絡願います。誌友会等の環境問題に関する参考となれば幸いです。

環境問題とエネルギーを皆で考えよう

《東京第一教区》<http://homepage3.nifty.com/souaika-i-tokyo/>《教育110番》<http://tokyo.cool.ne.jp/nisankatanso/saku.htm>
《父親教室(お父さん頑張って)》<http://homepage2.nifty.com/6789/index.htm>

相愛会環境問題編集部

平成17年6月5日発行 第002号

《エネ》岩谷産業と関西電力は2日、液体水素方式による移動式水素供給ステーションを共同開発したと発表した。

液体水素を使うことで圧縮水素方式に比べ小型大容量化が図れる。

低コストと移動式の機能性を生かし、今後の燃料電池車など水素エネルギーの本格普及に向けて貢献を目指す。

機器を小型化し、ユニット全体を4トン級の車両で運搬できるようにした。

液体水素方式の定置式ステーションはあるが、移動可能なステーションの開発は初めて。

装置コストは定置式ステーション建設費(2億3億円)の5分の1以下になる見込み。

貯蔵密度が高い液体水素を使うため、小型でも水素供給量を増やせる。

既存の圧縮水素方式による移動ステーションは燃料電池車2台分程度の充てん容量しかないが、新装置は同15台分に充てんできる。燃料電池車の普及には水素供給ステーションの整備が欠かせず、本格普及前の過渡期対策として移動式ステーションを開発した。

《エネ》東邦ガスと名古屋大学は、燃料電池(FC)自動車の普及初期であっても、住宅用燃料電池が並行して普及し始めれば、1年間で現状に比べエネルギー使用量が最大14%、二酸化炭素(CO2)排出量が最大22%削減できるとの試算を明らかにした。

燃料水素をFC車向けだけでなく、住宅用にも供給することで、水素ステーションの有効利用につながるとして、水素供給インフラの構築につなげていく考えだ。このシミュレーションは

、同社と名大の小林敬幸助教授、鈴置保雄教授、森川高行教授らの研究グループが実施した。FC車は導入初期の台数が少なく、燃料となる水素を供給するステーションの効率的な運用は難しいことが予想される。

このため、FC車向け以外の需要として、住宅に純水素燃料電池を設置し、そこから電気や熱を供給するシステムを考案。

《エネ》ロシア、中国、インドの三カ国外相は二日、ロシア極東のウラジオストクで会談した。これら三カ国の外相会談が設定されたのは初めて。政治的影響力の保持に動くロシアは、豊富なエネルギーを武器に、アジアの二大国を巻き込んだ三カ国連合の創設をもくろむ。だが、反米的なおいが漂う新たな連携に、日本や米国からは警戒する声があがっている。

ロシア東方進出の拠点で、極東戦略の最先端基地ウラジオストクは、中国が強い関心を示すシベリアの石油、さらにインドが参画するサハリンの石油・天然ガス開発の中心に位置する。経済を軸にした「戦略トライアングル」の主導者となることを夢見るロシアにとって、ふさわしい晴れ舞台といえる。

サハリンの資源をめぐり、中印と日本や韓国との競合も予想されるほか、「米国の一極支配に反発するアジアの三大国が、経済に次いで軍事面を含む政治的な提携を深めることは、アジアの新たな不安定要因になりかねない」との懸念が西側消息筋の間では出ている。

(産経新聞)

《環境》滋賀県草津市の国際湖沼環境委員会(ILEC)は4日、世界の湖沼が抱える課題や環境保全策を分析するプロジェ

クトの終了記念フォーラムを、同市の琵琶湖博物館で開いた。アジアやアフリカの各国から、深刻な水質汚染や外来魚の食害に関する対策が報告された。

プロジェクトは、ILECが2003年から実施し、28カ所の湖沼について、途上国を中心とする57カ国から提出されたレポートを基に、湖沼の開発と保全の在り方を検討してきた。

《環境》「緑化まつり」と「京都府低公害車フェア2005」が4日、京都府福知山市猪崎の三段池公園で始まった。ときおり雨の降るあいにくの天候にもかかわらず、大勢の親子連れでにぎわった。また、府主催の低公害車フェアでは、ガソリン車と比べて排気ガスや二酸化炭素の排出量が少ないとされるハイブリッド自動車や電気自動車、天然ガス自動車が展示された。

《環境》環境の大切さを学んでもらう丹後自然体験学校「ピオトープ倶楽部」の本年度1回目の活動が4日、京都府京丹後市弥栄町鳥取の府農業公園「丹後あじわいの郷」で行われた。参加者は園内で昆虫採集をして自然の多様性を感じていた。

4年前に始まった同倶楽部は、小中学生とその家族を対象に生物観察や農業体験などを行っている。同公園が主催している。5日は園内で古代米の田植えを行う。

この日、親子連れら参加者はピオトープ(動植物の生息空間)について学習、捕獲網を手に園内のピオトープを散策した。子どもらは、コメツキムシやアゲハチョウなど数10種の昆虫を捕まえ、講師の指導を受けながら標本にしたりしていた。